イギリスボランティア事情研修ツアー報告

中田宗一郎　（日本労協連）　　前川禮太郎　（武蔵野市の医療と福祉を進める会事務局長）

イギリスボランティア事情研修ツアーは、「ボランティア研究会」(注)が発想し、中川雄一郎先生の全面的な指導・援助をうけ、中川先生の旧知で英国在住の中村久司先生による日英の事情に精通された通訳に助けられ実現することができた。まず、両先生に深甚な謝意を申し上げたい。

イギリスのボランティア事情への関心は、CC（コミュニティ・ケア）共済の開発にあたって高齢協組合員と共済加入者のボランティア活動が必須となることから「高齢協らしいボランティア像を探る」ことをテーマに首都圏の実践家有志によるサロン的でラフな集まりの「研究会」の路線上から生まれた。

高齢協運動は、アメリカのNPOやボランティア組織から学ぶところが多くAARPとは連携がすすんでいるが、ボランテイアのルーツがイギリスにあるのではないかという認識が深くなっていった。

実践家には、研究者とは違った「現場」と「そこでの活動家」に直に触れ合いたい、交流したいとの欲求があって行動にかりたてられ、中川先生が長年にわたって積み上げてこられた研究実績に「おんぶ」させて貰うことになった。

実現したことでの成果と満足感は、予想を大きく超えるものであった。ウィルコックス学長（中村先生はそう呼んでいた）のレクチャーと我々のためにわざわざ用意してくれた論文には感激した。学長のバックアップが無ければ、中村先生の素晴らしい援助について学内からの保障は無かったろうし、訪問した７箇所の組織との交流もこれほどの充実したものとはならなかっただろう。人の縁に恵まれ、高齢者が頑張って13時間かけて空を飛んで元気に尋ねて行ったことへのご褒美でもあったと思う。

交流で、沢山の示唆に富んだ経験が聞け、「現場」に立つことで得られる知見にも接することができた。資料も戴いた。これから翻訳してくれる仲間を探し、前川さんと私(中田)のメモで書き上げた「報告」を補正・充実させること。「報告」の最後に載せている中村先生への前川さんからの質問や、学長が薦めてくださった「ヘルプ・ジ・エイジズ」や「ナショナル・ベンショナーズ・コンベンション」のこと、特に協同組合との関係など継続して研究する課題を掘り起こしたい。

なによりも対応してくださった夫々の責任者の方々から共感し合える「動機と抱負」を

聞かせてもらえた。歴史や活動環境や、言葉も違うのだから、沢山の違いがあって当然だが、僅か2時間足らずの交流で、共感し合えたと思えるのには何が根底となったのだろうか。

「ナイト・スポット」のジョン・ウォーカーさんは、「皆さんは高齢者、我々は若者、共通点は尊厳を守る、地域で活動すること」と言われた。

高齢協運動が、高齢者の尊厳と自立を守り発展させるために高齢者自身が他世代と協力・連帯してすすめる協同組合で、スローガンの「寝たきりにならない！しない！」「高齢者がもっと元気に！」、事業の３本柱―就労・福祉・生きがいとする理念・運動目標への共感はどこでもすすんだ。

「シチズン・アドバイス・ビューロウ」のクリス・ヘイリーさんは、動機を「世界を変えたい」と語った、なお、尋ねると「全ての人々の尊厳が守られる社会にしたい」とはにかみながらも誇らしげに語ってくれた。

訪問のベースとなったヨーク市は、人口18万人、そこにボランティア組織が大小400あると聞かされたときには耳を疑った。このボリュームと水準の高さがあって存在感のあるボランティア・セクターが形成され、自治体との関係が下から作られていっているのだろう。サッチャー・イズムの克服とブレア政権の路線がどう認識されているかまで尋ね話し合えるほどの信頼関係は、これから数次にわたる交流のなかで生まれるのだろう。

旅行4日目に「テロ事件」を知った。ヨークからアメリカ大陸に渡った人たちが開拓した地をニュー・ヨークと命名したという。今回のとんでもないテロ事件を因縁の地で知ることになった。世界中で様々な差別や宗教をめぐって抗争が絶えないしテロもおこる、どうすれば地球規模での真の平和が実現するのか、そのための本当に納得できる力の形成にどれほどの時間と命すら失う犠牲を払うことになるのかをこのヨークで痛感することになった。日本は難しい選択を迫られたと思うが世界が希求する平和の実現に貢献できる知恵の結集ができなかったわけで、その国民としてのもどかしさと遠く日本を離れていることでの不安を体験した旅でもあった。

僅か正味7日間の交流で、知りたいことの全てを正確に把握することはとてもできることではないが、「協同の発見」誌を通じてのこの報告と資料の紹介が、労協・高齢協運動にとって幾ばくかのヒントとなり、ボランティア活動の位置付けと関心の広がりに役立ち、交流の継続に関心をもち具体化に立ち上がる仲間が生まれるならばこれに優る喜びはない。

(注) ボランティア研究会とは、

研究会は、９８年１１月に始まる。高齢協運動が目覚しい発展を見せている反面、「残念なことに失望や不満すらいだいて活動から引いていった方々も生まれている」ことの認識から「高齢協らしいボランティア像をえがく」ことを目的に活動を始めた。

これまで、「ボランティア活動の仮定義」「第１回全国交流研究会の開催（９９／５）」「季刊ボランティアの発行（既刊４号）」を行い、本年は、ボランティア国際年の呼びかけにも協賛して「イギリスのボランティア事情研修ツアー」「第２回全国交流研究集会（０１／１０）」「季報（特別号）の企画」をすすめている。なお、研究会は、連合会設立までと期限を決めている。

イギリスボランティア事情研修ツアー報告

期日　２００１年９月９日～２０日（１２日間）

目的　わが国の社会福祉制度が根底から改革されている中で、市民は地域福祉の構築を目指して様々に活躍をしている。その中で高齢者協同組合はどのような役割を担うのか、ＣＣ共済とも関連して介護予防活動の取り組みには、地域で市民がボランティアとしてどのように結びつくのかなど、解明する課題が多くあるとき、ボランティア活動のルーツでもあるイギリスの実態を実践的に学ぶことで上記課題解明の展望を得られたらと企画した。

参加者　高齢協：小野正明・秀子（北海道）、前川禮太郎（東京）、田村文男（埼玉）
本多七海（センター事業団）、中田宗一郎・節子（労協連）
明治大学：中川雄一郎、中川亮子、平形真美、柳　幸春　計１１名

1.『リーズ大学リポンアンドヨーク：ダイアン・ウィルコック教授』と懇談

9月10日（月）　午後4:00～5:30
リーズ大学学長室

事前に15頁に及ぶイギリスの高齢者の現状を分析した論文を用意してくださっていて概要を話され質問にも快く受けていただき予定の時間を超える懇談が出来た。（14Pより掲載）

＊特に印象に残った指摘に、

・ ほとんどの高齢者は施設ではなく地域で生活している。そこでのケア即ちコミュニティケアが重要である。そのケアは地域での力を基本に政府の行うものとバランスを保つことが必要になる。
・ 現政府は、「老人に力を与えよう」をスローガンとし、地方自治体・ボランティア組織・老人組織が大学の力を借りて協議を行い、中央がどのような施策を打ち出すべきなのかについて意見を集約している。
・ ボランティア団体は、専門家集団として益々力を発揮してきている。参加するボランティアに対し報酬（スタッフ）・交通費・食事代・技能を高めるための費用が必要である。

リーズ大学学長（中央の女性）と

2.『ヨーク・ナイト・ストップ』訪問

（15～25歳の若者のための緊急宿泊施設）
9月11日（火）午前10:00～11:30
クエーカー・ガイド「フレンド・ホーム」
代表者　ジョン・ウオ―カー氏とアルマリー・ギルマンさん

＊ ボランティアで、若者の「つらさ」を共有して、「ほっとする」ことのできる「家庭での1泊」を提供する（30軒）
＊ 「つらさ」とは、「家庭や施設でのみじめな体験」「自信をなくしている」「意識が低くなっている」等
＊ 若者に、ドアを空けた瞬間から「あなたの家ですよ」と提供さされる1泊の意味は大きい。明日からの元気、これまでを

振り返ることができるターニングポイントとなる。

＊「1泊の提供」は、受け入れる家庭に負担をかけない。ナイトストップの役割は、地域社会と自治体・中央との間に入り若者を保護すると同時に善意をもって宿泊を引きうけるボランティアの安全を守ること。

＊ 本来このような社会問題は、公共の責任だがボランティアに移行してきておりボランティアの方がうまく行く。

＊ 国からの援助は受けず（行政から独立して活動するために）、地域からの寄付・ボランティアで賄う。

＊ 運営は、チャリティであると同時に会社組織。高い理想と冷徹に頭を使って継続を図る。

＊ 皆さんは高齢者、我々は若者、共通点は尊厳を守る、地域で活動すること。若者と地域社会の掛け橋になりたい。

＊ マスコミ・社会の支持を得ることに心がけ、重視している。社会的認知がボランティアの意識を高揚する。

＊ 動機と展望

- 世の中に変化をもたらすことができる。自分のやりたいことを自由にやれる。
- 人間が好き。

ナイトストップで

- 事務所を大きくしたい。カウンセリングの支援。自分たちの施設を持つ。ホームレスにも仕えるように。

3.『ヨーク・マインド』訪問

（精神障害者支援：カウンセリングおよびアドボカシィ―権利擁護―サービス）

9月11日（火）午後2:00～3:30

午前と同じ会場

代表者　レベッカ・リーさん　マーティン氏

＊ 精神障害を、病気だけでなく地域とのかかわりも含めた広い意味で扱う。現代のイギリスでは、4分の1の人がなんらかの不安をもち支援を必要とする状況にある。

＊ 対象は16～65歳。情報の提供、アドバイス、カウンセリング。

＊ 運営は、チャリティで会社組織、全国組織の一つで、ヨークでは一番大きい。

＊ 全国との関係は、情報・訓練を受けるが財政的援助はない。

＊ アドボカシィ（人権擁護）

- 基本的には、『ヨーク・マインド』が伝達者となって社会に伝える、誰にどう伝えたらよいか、伝える努力をしている。
- 老人にも必要と考えられるようになってきた。
- 判断力が低い精神障害者、ボケ症状の老人に情報を伝えることが大切だが困難さ・壁にぶつかる（医者が指示的に。例えば、遺書を書いて貰う場合弁護士は大きな力を持った人として写る。）
- 対象者に「どのように近づくか」「どのように進歩するか」（全てのことの代行ではない、自ら行動できるように、障害者の達成感に合わせたス

ピードで。健常者はいとも簡単に気持ち・考えを否定する。）

- カウンセリングの方法も変革されている、新しいものは相手を中心におき全体像を語ってもらうことを重視する。
- ボランティアだからこそ生きてくる。権威を持った専門家ではなく一緒に道を見出す。ボランティアの半数は自らが経験者なので非常にうまくいく、経験を通して専門家になる。
- ボランティアを4つのグループに分け各々専門的に取り組んでいる。研修にも力を入れている。ボランティアを希望する人のうちから厳しく選択して参加を認めている。特に自分の考え方・理想をおしつける傾向の人は断る。
- 訪問メンバーは強い関心を持ち、活発な意見交換がされた。

＊ 動機と展望

- 非常に多くの仕事をしてきて疲れた、そのとき援助を受けた。自分のやりたいことをすることにした。2年半になる、今年の7月から責任者になった。ボランティアは創造的で自由、財政がネック、寄付を多様な支持層に働きかけている、自分の給料は他から得ている。

4.『ブランスウィク有機農園とクラフトワークショップ』

（園芸・農作業を通じて学習障害者に労働体験・職業訓練）

9月12日（水）午前10:00～11:30

市内を出た南部にある園芸・農作業所、クラフト（包装紙・押し花・織機工房）、ショップ（有機野菜、堆肥、土、クラフト）

代表者　アダムス・マイヤー氏

シュタイナーさん

ブランスウィク有機農園

＊ 2.5エーカーの敷地で、有機野菜、ハーブの栽培とそのための苗・堆肥・土づくりが労働体験と職業訓練の場になっている。通園者は、それぞれの持ち場があって嬉しそうに説明をしてくれる、作業を通しての発達の様子がわかる。

＊ 障害者を施設に入れ社会から隔離することには反対である、社会とつながりを保ちながら目的をもって仕事をすることにより障害者は成長・発達する。

＊ 通園者の1週間、学校・就労（レストランなど）・通園・土日は遊ぶ。「賃金」はない。

＊ 各パートでボランティアが、通園者の社会復帰のためのトレーニングにあたっている。

＊ 通園者農園10人、クラフト4～5人、ボランティア5～6人、専従者4～5人。ロッカーは28あった。

＊ 事務所はロッタリー（宝くじ）資金をえて建設。2Ｆに管理人が居住。

＊ 運営は、チャリティで有限会社。財政は、ソーシャル・サービスからの訓練費・寄付金・援助費。

＊ 冬場の作業作りは、頭が痛い。

＊ ショップでは、ハーブ・有機野菜・グリーティングカードが人気。

＊ 動機と抱負

- 好きで来た。ものを作っている作業

実感がある。有機野菜を効率的に、規模を大きくしたい。アダムス氏：他のいくつかの施設で働いていて、ここに来た。障害者の可能性に向けた商業ベースの事業化へ挑戦してみたい。

5.『ヨーク・ボランティア・センター』

（ボランティア団体の育成・情報提供などボランティア団体のセンター）

9月12日（水）午後3:30～5:00

代表者　ダーン・オロッケ氏　ドイツからの研修生

センター内にて

＊ このセンターは、共同で何かをするところではない。ボランティアは独立心が強く中央から言われることを嫌う。が、水害などでは力を合わせる。いろいろな案内書・IT端末を揃え、一般向・ボランティアが他から学ぶ・新たにボランティアを作るなど資料提供と助言をする。事務所・会議室の提供。1939年に設立された。

＊ センターには、20人のスタッフがいる、関連施設に保育園・学童保育・ワンペアレンツがある。含めると40人、独立するまで援助する。

＊ 各種ボランティア組織と中央政府・自治体等との間に立って情報交換・手続きなど仲立ちをする。ボランティア組織の代弁をするわけではない。

＊ 中央政府が施策をするとき、ボランティア組織や地域代表の意見を聞き一方的にはやらないことを義務とする新しい潮流が出来てきた。

＊ コンパクト（未稿）

＊ ヨークには400のボランティア組織がある、内150は有償者がいる。250は小さな組織でチャリティ登録をすると会計報告が義務となる。ボランティア組織で働く200人の有償ボランティアの支払いと納税の実務を低い会費で援助している。ヨーク市の人口18万人。ボランティア人数を計算する方法が無い。

＊ 有償者の待遇は、民間・地方自治体と同等を基準にしている。無償者の交通費・通信費はポケットから出させない。貧しい人たちも参加できるように、また、参加の平等原則からも。ボランティアには「時間」以外のものは出させないというのが基本的な考え方、従ってボランティアには技能・知識・時間を提供してもらう。

＊ ヨーク・エイジ・コンサーンはここから独立した組織。

＊ 運営は、チャリティで有限会社。ヨーク市からは独立している、助成は財政の10％他は寄付・サービス提供料。

＊ リーズ市は90％の助成、英政府はヨーク市のようなところを多くしようとしている、確実な実績があるところはほったらかし。

＊「所長が苦労する」をめぐって突っ込んだ意見交換。

＊ 動機と抱負

・ ソーシャルワーカーだった、公的機関の限界に不満で25年間やってきた。給料が下がっても自由で、実験が出来て、面白い。社会政策に関心がある、新しい病気（精神）・社会問題に挑戦したい。

6.『スナッピー』

（特別なニーズをもつ子供や若者のための娯楽・リクレーション活動の促進と設備の充実をめざす）

9月13日（木）　午前10:00～11:30

代表者　アン・ペムパートさん　ロックス・アンさん　他

＊ 各種の障害児の特に春・夏休みに交流の場が無くなることへの対処として学校を借りて20人から極めて単純に始めて17年になる。

＊ 今は300人と大きくなりつつある、要因は①医学の進歩で障害が早く発見され広く認識されるようになった、②学校の先生の注意と理解がすすみ早期発見されるようになった、③親の教育水準・意識の高まり等から需要が増加したこと。

＊ 年齢を3階層（5～12、～19、～25歳）に分け、遊び・諸活動・就労（職）・生活上の技能確保（自信・自尊心をもつ、料理・洗濯・お金の使い方・バスに乗る・道の歩き方・履歴書手紙の書き方、コンピューターの使い方、ホリデーの過ごし方等）を目指している。

＊ 利用者の99%が、1対1の援助スタッフが必要なのでボランティアがいなければ成り立たない。高校・大学を訪ねてボランティアの主旨を伝え参加者を得る。若い人たちは自分も遊びたい、ボランティアがなんて素晴らしいと感じること、楽しく、意義あること、ボランティア同士が交流できること、実利があること（専門家と一緒にやることで専門知識が習得できる）、自己成長・変革ができることを体験することになる。1日150人が参加。5～6の学校を使用して活動している。

＊ スタッフは3名、内1名はパート。スタッフを最小に押さえ財源を子供のために使う。

＊ 利用者は市内,近郊からも、両親の送迎、ミニバス（料金がいる）を準備、列車で1時間かけてくる人もいる。

＊ ここのように障害を限定しないで実施しているところは他にはない。

＊ 運営委員会（ヨーク市、ソーシャル・サービス、レジャー・サービス、両親の代表、特殊学校の代表）が月1回もたれ活発な論議がされる。

＊ 財政は、ヨーク市21%、個人の寄付、宝くじ、企業、利用料（1日5ポンド）

＊ 動機と抱負

・ アンさん：子供が好き。ここが無ければ子供がどうなる。アナさん：キプロスの学校にいた、ここが働き場所と気づいた。Aさん：25歳まで市の職員。全く知識は無かったが、子供に関心がある。

7.『シチズン・アドバイス・ビューロー』

（給付金、借金、雇用、住宅などについてのアドバイス・情報提供・権利擁護）

9月13日（木）　午後2:00～3:30

代表者　クリス・ヘイリーさん

＊ 全国に2000ヶ所のブランチをもつイギリスで一番大きいボランティアセクター。ここには6つの相談室があり60人のスタッフがいる、内10人は有償、50人は無償。有・無償とも同じ仕事をするが予算が限られるため納得して行っている。ボランティアは地域に貢献したいとの思いで利用者に実践的・法的なアドバイスを無償で行っている。弁護士料金が高いので意義は大きい。

＊ 1939年、60年前に設立され、戦後の混乱期に発展した、労働党、保守党も支持している。設立以来の2つの原則、①知識の欠如によって被害をこうむらないようにする、②行政・立法機関に、よりよ

い社会をつくるらせるために各種提言し実現に努める。

＊ 利用者から広範な質問を受ける、①生活費の相談、②住居費（ホームレスを含む)、③家庭崩壊（離婚・子供の養育)、④借金（カードの普及）などどんな質問にも答える面白い仕事。

＊ 基本原則、①無料、②プライバシィを守る、③政府から独立したアドバイスをし、それを実現できるように支援するので相談に来る。通常、役所には「もれる」から相談しにくい。1週間に300人が訪問・TEL・FAX.・手紙（メールは準備中）による相談があり、中央と共有する。データーベース（生活に関わる法令を普通の方が分かる法令集として作成し対応している)。

＊ 市の職員とボランティアとは、ファーストネームで呼び合う協力的関係にある。

＊ 裁判論争に備えた2チーム（借金・倒産、社会保障サービス）が、法廷で代理人となる（弁護士がいらない、無料)。

＊ 運営は、チャリティで有限会社。委員会が年4回もたれている。委員は15人で構成はボランティアサービス、エイジ・コンサーン、市議、有償ボランティア代表、無償ボランティア代表。小委員会（品質、平等な取り扱い)。

＊ 全国組織は、スタッフ・ボランティアの訓練プログラム、活動資金の作り方、相談アドバイス、マスメデイア対策、国会への働きかけ等にあたる。

＊ 私たちは、全てのことを知っているわけではない、相談・IT情報コーナーに専門家もいて、中央が作った14000項目に及ぶ情報を活用することでカバーしている。（コーターの見学とフランシス氏の紹介を受けた。）

＊ ビューローでの相談はフォーマットにそって記録される、その作業の中で、法律そのものがおかしいと思うことが中央にあげられる。中央は、2000ヶ所からあがる中で共通することがわかると政府にあげる。

＊ 動機と抱負

・ 世界を変えたい。全ての人々の尊厳が守られる社会にしたい。

8.『エイジ・コンサーン』

（高齢者自身と協力して自立を助ける：ホスピタル・アフターケア）

9月14日（金）午前10:00～11:00

組合員手づくりのお土産を渡す

市内のリサイクルショップの2階にある事務所

代表者　サリー・ハチソンさん　議長モーティバ・ジェフ氏　ジェニーさん

当日は、運悪く税務署の実地監査と重なり、対応された両氏はてんてこ舞いの状況であったが誠実に対応してくれた。（AGEの要請で、部屋が狭く、参加人数は5人となった）高齢協全国連合会設立総会へのAGEの連帯メッセージの要請について懇切な対応を戴いた。

＊ 運営は、リサイクルショップ（衣服4店、家具2店)、保険、市との契約、街頭募金（年2回)、寄付（遺産など)。独立採算。総会に会計年次報告をする（報告書を貰う)。地域の特徴・ニーズに合わせて運営される、ヨークでの特徴では、一人暮らしの強いニーズに庭仕事がある、最低の所得層を優先している。

＊　スタッフは、有償48人（内、フルタイム4人）、ボランティア400人（女性が多い。15～95歳。大学生、退職者、フリーターなど）。

＊　30周年になる、10月2日にミンスターで祝典をする。そのための活動資金づくりを9年前から始めている。

＊　ホスピタル・ケア（通院後、通院介助、介護者を助ける）についてジェニーさんから、

・　コミュニティケアとして、家事援助など一般的なものは行わず退院後のケアに絞った援助を行っている。

・　退院後6週間、生活を取り戻すまで援助する（ショッピング・年金代理受け取り・情報サービスに限定。）対象により3泊まで泊り込み、自立を支援したり、通院介助も行う。事業費は、ＨＮＳと市から一部分は支給される。

＊動機と抱負

・　残念だが聞けなかった。

9.『ロッチデール・ミュジュアム見学』

9月15日（土）　午前9時宿舎、10時ヨーク駅からマンチェスターに向けて出発。

ヨークは快晴、列車はどこまでも平坦なイングランド北部の平原を2時間走る、いつしか丘陵のようにしか思えない山脈を越える頃から気候は雨にかわり肌寒さを感じながらロッチデール駅に到着。中川先生の「なんにも無いところだよ」というロッチデールはマンチェスターの郊外市へと変貌中の模様、先生の15年前の記憶を頼りに雨の中道を尋ねながら15分ほどで、あの写真で見覚えのある建物の前に立った。協同組合人の“聖地”、ロッチデール先駆者組合が150年前に発祥した地に立った。内装は小さな小さなミュージュアム、展示物は簡素だが感動する、事業開始時の秤、手押し車、自転車、旗、教材。ロバートオーエン・ホリヨークなどのコーナーもある。パイオニア13人の大きな壁写真が小さな博物館を圧倒している。館長さんは日本からの見学者グループを体いっぱいに歓迎し、古い来館者名簿を取りだして「写真を撮れ」と言い、日本からの見学者の関わりを語る。メンバーはそれぞれの思いを込めて来館の記帳をし、記念の品を求め写真に収めた。

建物の中にあるバーで昼の軽食をとりおわると、戻りの列車の時間が間じかになっていた。

ヨークでの充実した日々を締めくくるにふさわしい小旅行となった。ヨークに戻ったのは午後6時であった。

ロッチデールにて

前川さんの中村先生への質問メモ

１．９０年の「コミュニティケア法」により、サービス購入者とサービス供給者の分離が行われた。
＊その具体的内容と現在の評価
＊対象（アセスメントを受ける）は、高齢者に限らず障害者（高齢者でない）も入るのか。供給するサービスの種類に、高齢者と障害者の相違はあるのか
＊ケアマネ（ソーシャルワーカー）が予算決定権をもってケアの内容を決め、コーディネートするのだろうが、現物給付でなく現金給付もするのか

２．施設入居に関して
＊シェルタード・ハウジングと、レジデンシャル・ホームとの相違
＊個人の利用料（負担額）は相当大きく、資産調査により決められるとのことで自宅を売却しなくてはならないとのこと。扶助制度はどの程度のものなのか。

３．「介護者支援のための国民戦略」（ケアする人たちのケア）を現政府は重要施策としていると聞いているが、その中で、
＊「介護者センター」（どのようなものなのか）への支給
＊介護者への所得補助など強調されているとのことだが、介護者への「現金給付」の考え方はあるのか（ドイツのように）

４．その他
＊「終末期を在宅で」というコミュニティケアの体制は？
＊イギリスの特徴であった「居住」対策（まず、住むところを保障する）の現状は？
　マイノリティ・移民を含め貧富の格差が拡大している中で（ホームレスの増加）、ヨークでは感じられず。
＊ＬＥＴＳのこと。

エイジコンサーン、１Ｆはリサイクルショップになっている